

散る墓標

新田裕麻

くれなゐの花

箸でつまみ 白い箱におさめるとき

時に

折れ曲がり 砕け 焦げた匂いを発する

（ぶおー）

夕暮れ時はずいぶん遠くでホエールが鳴いているね
くじらの亡骸

腐った体からおぼろの肉がほろほろ散り

骨でかこった箱庭に住まういきものを乗せながら

冷たい海を 遊覧している

（ぶおー）

と腹が鳴るのを

笑うことも耳にすることもない

女

安楽椅子に腰かけ とがった鼻先が透明になっている

風にさらわれた花弁

波間をぬけ

浜へ打ちあがる

燃えそこねたのだろうか

首筋をせずに避けていった